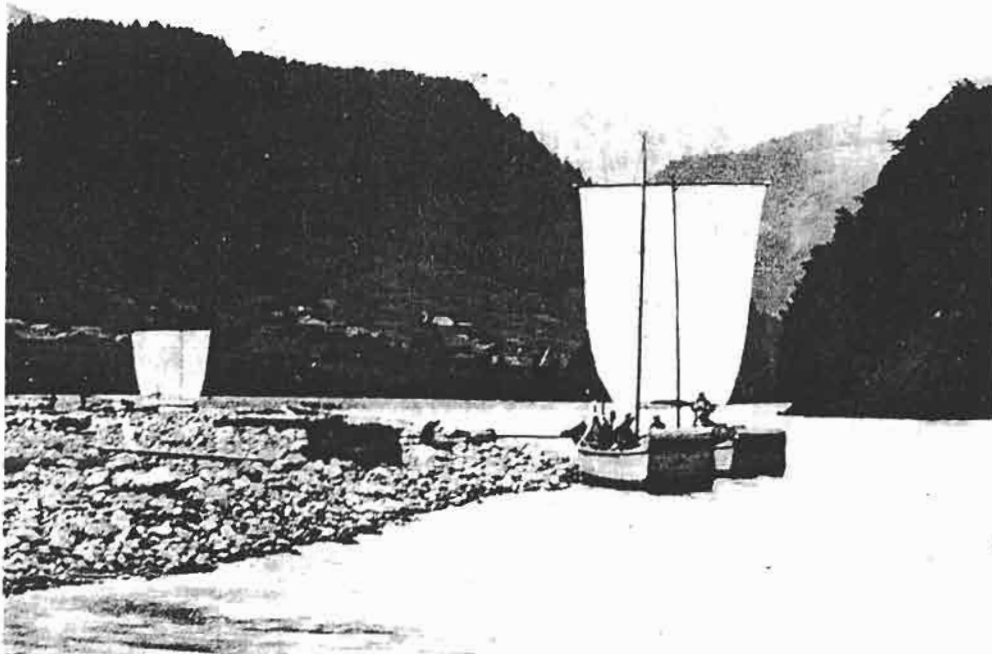


# 中川根ふる里通信

## = 第5号 =

編集・発行・モア・ラフ中川根  
連絡先 7428-03  
静岡県榛原郡中川根町上長尾 970  
中川根町役場総務課  
ふる里通信係  
TEL 05475 (6) 1111  
郵便振替口座(655屋) 7-21556

### 高瀬舟



上長尾前の高瀬舟

写真提供

上長尾高畑恵造さん

「あれ見よ、きょうは猿っ鼻に帆かけ舟が九杯もきたよ」と祖母が指さす。それは平谷の先の大井川をゆっくりと上ってくる高瀬舟のことである。

大正時代私が小学生の頃の記憶である。

舟は一日に一隻のこともあり、三隻来ることもあった。

船頭は石ころの川床を這うようにして綱をかついて舟を引、張つてのほるのである。

舟には米俵や醤油樽、酒樽盛がま、アンペラごもの砂糖等が積んであった。

舟は大ていつ夕方の間に着いて荷を降ろし翌朝帰り舟となる。

下り舟には木炭等の積荷の間に、お客を乗せる空間が設けてあって町へ出る時は、この舟に乗って

向谷まで下ったものである。

明治四十一年父も入隊の時見送られて舟で行ったそうなる。

祖母も伊勢参りに行ったそうである。

昭和四年三月、私も舟の客となったことがある。

地名の背戸川原の堰堤附近にさしかかると船頭が

「お客は降りて地名の渡船場で待っていてくれ」と言う。

神の瀬からつづらの前を舟が迂回する際、水量が少なくて

舟が重いと動かないからだそうなる。

心細い思いをしながら地名の村を歩いて渡船場で待つこと

はし、漸く舟が昭和橋の向こうに見えて来たときはほっとして

再び舟の客となって向谷まで殆ど一日がかりで着いた。

茶摘み唄に

「一か、二か、三か、鹿さんの舟で鶴山難なく向谷まで」とい

昭和六年に大井川鉄道が千頭まで開通となり

高瀬舟は姿を消した。

私は地名の村を通る時、水車小屋が何ヶ所にもある村だなあ

と思つたが後にこの村の住人になろうとは知る由もなかった。

他石地区婦人会 おじいちゃん おはあちゃんの

思い出話より 宮下キク





# 母校は今



## その5. 下長尾小学校

母校は今1の題を与えられて、下長尾小学校の思い出を書く事になったが、昭和五十年統合前の川根南郷小学校に発展して、下泉橋のたもと大井川畔に三階建鉄筋校舎、体育館、水泳プール、広いグラウンドと、面目を一新した立派な学校となったので、下長尾の名称は消えて、思い出の姿なき学校となつてしまった。

昭和二十七年旧来の本校舎が改築されて、木造二階建六教室、音楽室、職員室の一棟と、渡り廊下で結ばれた二階建の宿直兼休養室、礼法兼裁縫室があったのが、空家となって森林組合、青年会館に利用されていいたのであるが、昨年他に移転させられて、校舎は取り壊され、その跡地に、地域振興センター下長尾集会所が建設となり、去る二月十四日落成式が挙行されたところである。

昭和四十二年下泉小学校と徳山町町内分校とが統合した時、北側に併設された特別教室のみが残されて、下長尾簡易老人憩の家として利用されているのみで、当時の面影はなくなつてしまった。

私が入学したのは、大正六年で七十年前の事であつて、坂道を登つて校門をくぐるとすぐ右側に本校舎があつた。明治七年昌林庵を下長尾小学校として開校し、学区は瀬沢、平谷、高手山に及んでハナツラ峠ヨコガレを越えての通学だから、下長尾の子供に比べれば大変な事である。其の時建築されたのがこの本校舎で、教室も職員室も高床式で、三段位の階段の出入口であつて、五六年複式教室と職員室の隣りは、裁縫室兼宿直室であつた。

運動場を中にして南側に新校舎があり、長い渡り廊下で本校舎に接していた。一二年複式教室と板戸仕切りで、三四年複式教室の木造杉皮葺平屋建の校舎であつた。三四年教室の正面は、天皇御真影の奉安所であつて、仕切り戸をはずし、全校児童が集まる式場となり、入学式、卒業式、新年拝賀式、紀元節、天長節が厳粛に行われたものであるが、終戦と共に廃止されたのである。



左、校舎あとに建てた地域振興センター下長尾集会所。地区の会合や健康診断など地域のための集会所です。

上、運動場の影は松です。

右、下長尾簡易老人憩の家(特別教室)

下、中川町立南郷小学校(学区は又野郷小、又保尾小、下泉小、徳町河内分校、下長尾小)



この新校舎も二十七年に取壊し、運動場が拡張されたのであつたが、五十八年教職員住宅が二棟建設せられ、中山根町内小中学校へ遠地より赴任される先生方の宿舎となつてゐる。この東端に枝振り良く大きく生長した松樹があるが、入学した当時一二年の入口にあつた細い松樹で、昔を語つてくれてゐる一本の懐かしい遺物で、当時を知る者は懐しが、眺めるのである。

下長尾

中野幸逸

中野さんは九年前教育長をされふる里の教育文化向上に貢献されました。現在は下長尾老人クラブ会長、中川根町老人クラブ連の副会長として活躍されています。

私の母校は以上のような変遷で、既に姿はなくなつたけれど、明治七年以来卒業した者は、町内外に於て活躍され、立身出世、人生に成功し、社会に貢献された多くの入道があることに、感謝と敬意を表し、ペンを置く。

# 町づくりに思う 助役 勝山彦治



要問題は、町の緊急を要する検討課題である。

町づくりは息の長い仕事である。終りのない旅路にたとえてもいい。一つの目的を達しても、また次にやるべき仕事ができなくなる。一山越え、二山越えるたびに町づくりの目標は大きくはなり高くなる。旅に似て町づくりは喜びも悲しみも苦しみもある。物事をすべてが思いどおりに運ぶわけではない。いろいろな困難への挑戦を通じて町づくりは展開する。挑戦こそが町づくりの原動力であらう。

町づくりで取り組むべき課題は、広範多岐にわたっている。産業経済、社会生活環境、教育文化、住民福祉等、どの分野をとっても、農山村をめぐる現状は厳しい。それだけに当面する諸問題の克服は容易ではない。そこで肝要なのは、地域リーダーの創造性をもった意欲と行動力であらう。とりわけ現状では好むと好まないにかかわらず、行政の役割は大きい。一般に行政主導の町づくりは、住民主体のそれに對置される場合が多い。そして前者に對する評価は低く、後者には現代的な町づくりとして、推賞される。こうした判断は、あまりに形式的であり皮相な見方ではないだろうか。現状を直視するとき、両者の統一こそ追求されるべき方向であると、私は考える。

町は活気にみなぎっている。

然しながら、今当町を取り巻く環境は、非常に厳しいものになっている。即ち、基幹産業である茶業、林業の問題をはじめ、若者の定住、すてに始まっている高齢化社会等、どのように対応すべきか、極めて重大な課題である。町の緊急を要する検討課題である。



中川根町役場 (高郷地区内)



中川根町山村開発センター(右) 体育増進施設(左) 会議室、展示場、図書室。(最近会議室で結婚式も行われました。)教育委員会など

今、高度成長から後成長へと転換していく時代の中で、人の価値観も物の豊かさから、心の豊かさを求める傾向へと変わりつつある。その中で、多様な可能性を秘めた山村が再び見直されようとしている。我が中川根町には、他にない恵まれた美しい多様な自然、郷土愛に根差した住民の強い連帯意識がある。これを起爆利として、この町に住むことに誇りをもたせ、施策が必要である。

行政と町民が一体となって地域の特性を生かす。二十一世紀に向けて活力ある豊かな町づくりをめざし、町民の信頼と理解を求めながら、的確な先見性をもって町づくりを積極的に推進しなければならぬと痛感している。

その意味において、中川根ふる里通信の発刊は、時宜を得た企画であり、誠に同慶に絶えない。願わくばこのふる里通信が我々中川根町を見直す契機とならばと大いに期待して止まない。

ここに中川根町をふる里とされる皆様方の今後のご活躍とご健勝を心から祈念するとともに、ご多忙のところ、ふる里通信の企画編集を担当下さいます関係者に、心より感謝を申し上げる次第であります。

中川根町 下泉



どうたんつじ



# 川根 索道



地名 中原すま子

桜の花も散り初めたこの頃、山は木々の芽の萌え出づる季節です。この一週間から十日間位の雑木林は、秋の山にも噂して美しいと私は毎年のように眺めます。淡い紅、黄、そして萌黄色それは日々変化してやがて緑一色に染められます。この短かい美しい季節を都会に住まわれている方に送ってあげられたらと思つてしまふこの頃です。この山を索道が走っていたと聞きました。大きな撤撤(ゴンドラ)が鉄索の線にぶら下がり、行き来している様子と思ひ存へると何か夢を見ているような気がします。

私達地名の婦人会では、婦人学校の学習で、おしいちゃん、おはあちゃんの思い出話を聞くことをとり入れてみました。私達の知らない想像するのも難かしいような話も聞きました。その中の一つに、索道の話があったのです。辞令をもらって正式に勤めた人はもう皆人になつて私一人になつてしまつたと言ひながら大塚さんは親切に、熱を持って話して下さりました。「思い出話集」の中に掲載したものをそのまま紹介したいと思います。

索道が出来たのが大正十五年でした。私が索道の駅に勤めたのが昭和三年の四年頃だと思います。それから昭和六年に鉄道が出来、昭和十五年頃にそちらから入つて瀬戸ノ谷まで来て、瀬戸ノ谷から空中輸送で地名まで一時間半位かかりました。送られて来るものは、生活物資でした。米、味噌、醤油、酒、新聞などでした。そしてこちらから木材や木炭、お茶を送り出してやるのです。初めは線が地名まででした。地名から奥へ行く荷物は、地名の背戸河原に運びこみ、通船で上げました。索道が出来る以前は、島田から船で一日かかつたものだった。そのことを思ふは、画期的なもので、川根の交通史には、欠かせないものだと思います。小学校の遠足の子ども達も、あちこちからよく見学に来たものです。

索道の線は、滝沢と伊久美が一區間、伊久美から桑野山が一區間、桑野山から地名まで一區間で、三區間になっていました。機動所は伊久美と地名にあり、鉄柱から鉄柱へ線は渡つていて、鉄柱の高さは、高い所で四十メートルもありました。そこへ登ると高く、怖いくらいでした。

今も中ん法へ行くとき柱を取りつけたアンカーポイントが残っています。この線にゴンドラが下がると、それに車か八つづいてきます。入つて来るゴンドラと送り出すゴンドラと常により下りていました。

一つのゴンドラには、米なり三俵、四斗樽で二本、炭俵で七俵束り、すいたから、結構大きなものでした。保線士という係があつて、鉄柱に油差しに行くのですが、油缶を背負つてゴンドラに乗り、鉄柱の所に来ると飛び移るのです。降りる時はゴンドラの後に乗り、乗る時は前から乗るのです。やうしないと動くゴンドラに押されて危ないのです。ずいぶん危険な仕事をしたものです。落ちて亡くなった人や怪我をした人もいます。

この索道は、島田、金谷から物資を上げてくれないう時があつて、それで困つて山下さん達が奔走して、藤枝へ物資を受取りに行つて来ました。山下さんが発起人で、いろいろな人に働きかけ、岡本谷さんという上河内の駅長だった人が協力して、索道ができました。今徳山の神主さん(林さん)は藤枝から出張して来ていて、こちらに住みついた人です。

ゴンドラが高い所を通るので、風には弱く、大風が吹くとゴンドラが柱にぶつかつてよく物資が下に落ちました。米など空中分解して、もう拾ひに行つても物にはりません。風ばかりでなく、ゴンドラどうぶつがぶつかつて落ちることもあり、やういう事故が度々あつて、賠償しなければならぬので、会社も大変でした。給料は二十円位だったと思ふ。当時小学校の校長先生と、東海紙料の主任さんが五十円の給料と言われたり、二十円でも給料をもらえろということは大いに助かりました。

奥へ発電所が出来るといふこと、地名から線がのはされました。発電



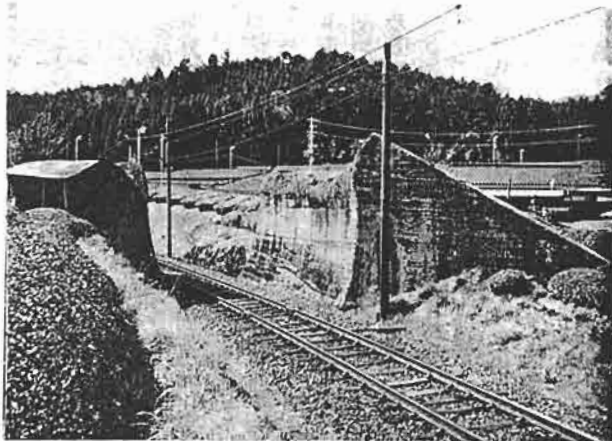
川根索道 地名駅 写真提供 上長尾 高畑 忠造さん

# 1987 グリーンティオリエンテーリング<sup>®</sup>が行われます。

いつ 4月26日(日)  
 どこ 大井川鉄道下泉駅前スポーツ広場  
 コース 下泉～塩郷(松島キャンプ場)パーマネントコース  
 当日参加もOKですから 詳しい事は校場事務課まで問合せ下さい。  
 TEL 05475(6)1111



コース付近では、新茶の「摘み初め」も見られそうです。  
 当日 中川松竹新茶まつりも行われます。新緑の野山を かけて歩いて、  
 みませんか。



金谷側 上部こわされた保安トンネル



千頭側 保安トンネル。すきせ川ぐみがしげっている。S.L.カメラマンなど、休養日はにぎやかです。

⑦七六日如来は、  
 道祖神の様な神様で  
 地名地区へ入ってくる  
 道々に地区を取り  
 囲むように立ってお  
 ります。現在祠があ  
 る所はニヶ所ですが  
 地区の護り神として  
 復活させたいの事です。

所を作る材料を運ぶのに他に輸送機関がなかったのです。山を四り開いて線を張るのに発電所を作るということでは用地交渉が難かしいので、生活物資を運ぶという名目で作りました。

地名「塩郷」下泉の原「田野口」徳山「青部」田代「桑野山」岸「沢間」と線が千頭の奥の沢間まで続きました。その頃の発電所は第三富士と言いました。そして発電所を作る材料であるセメント・鉄材など運んだのです。仕事は保線士・電気系統・事務荷物扱いと大勢いました。結構忙しくて夜勤もありました。

島田から船で上げる時千頭まで三日もかかったのが、索道だと三時間で行ってしまったから当時としてはすごいことだったので、索道が高瀬舟を追い、鉄道が索道を追い、そして今、車が鉄道を追まわっている。これが川根の交通史なのだと思います。

地名駅から金谷側に一つ、千頭側に一つ、小さなトンネルがあります。これが上と通っていた索道から鉄道を守る為の保安トンネルだったので、金谷側のトンネルは桑野山から入って来る線のために、千頭側のは、地名から奥へ行く線のために作られました。金谷側のトンネルは鉄道が電化する時上の方がこわされたのが、千頭側のは大きかったためそのまま残され、トンネルの上は雑草におおわれ、地名の風物詩になっています。

私達婦人会員は他地区から嫁いで来た者がほとんどです。地名の昔を知らない者は少なくて、おじいちゃん、おばあちゃん、おひいちゃんのお陰でいろいろのことを知りました。昔、地味から悪い病気が入ってこなかった、守るための七六日如来があることを知り、地名の歴史研究会の方の案内で、歴史探訪のハイキングも行いました。地名にあった発電所の話も聞きました。田んぼへ水を引くための用水路を作る時、提灯で測量した話も聞きました。地名を支えて来た立派な人々が、大勢いたことも知りました。地名の昔を知り、ますます地名を愛する婦人会でありたいと思っております。



カット 高丘 葉さん

# 郵便と短銃 上長尾 太田辰男

私が郵便局へ勤務して間もない頃（昭和十七年頃）、先輩から「昔の遞送手（郵便物を運送する人）はピストルを持っていたよ」と言う話を聞いたことがある。

戦前の警察官はワケルを腰に下げピストルは持ってはいない。それなのに遞送手はピストルを持っていたと言う。正式に許可されて所持していたのだろうか。

郵便制度が実施されたのは明治四年四月二十日、それから三年経た明治七年五月一日に中山根郵便局の前身上長尾郵便役所が設置された。郵便物は、静岡市と本川根町境の浅沼に郵便物交換所が設置され、上長尾郵便役所区内の郵便物と区外へ出る郵便物が交換されたようです。この郵便物を運送する人が遞送手である。

ある時遞送手が山中で賊におそわれ殺害された事件があった。こんなことが全国的にあったようである。遞送手にピストルの携行が許可されたようである。明治六年十二月、駄邊頭前島密から取扱役に沢りようは通達文書が発出された。（郵便史話 小林正義著より）

『郵便行囊』に際し、郵便物ヲ保護シ脚夫ヲ殺傷致候賊徒往々有之公私通信ノ便ヲ妨ケテ事ヲ泄シ不容儀ニ付以て六連短銃何番合テ何枚御預ケ相成候茶夜雄登屋ニ不拘右短銃ヲ一挺ツツ脚夫へ可爲携就テハ深ク郵便物ヲ保護被改候御趣意ヲ相并へ苟クモ凶器ヲ弄シ候様ノ所爲有之候テハ不相済次第ニ付最モ謹慎ヲ加へ取扱可申候依テ左ノ規則ノ通り相違候相方共ハ勿論脚夫へモ厚ク申論シ不取捨無之様注意可致事。

但短銃預リ証書ハ別紙難形ノ通相認メ証印ノ上當察へ可差出候事』

これにより明治六年には、東京府始め静岡果松果を合じ二府八果に四百挺の短銃が配備された。全国的に配備されたのは、明治十四年頃であったようである。

遞送脚夫が短銃を携帯したのは、身の安全を護ることではなく、郵便物の保護と通信の秘密の確保という高い使命にあったのである。

昭和二年に大井川鉄道が家山まで開通した。それに伴い葛巻に郵便交換所が設置された。昭和六年に大井川鉄道が千頭まで開通し、川根地方の郵便物がすべて大井川鉄道を利用して運送されるようになった。それまでは、この郵便交換所を利用して遞送脚夫が郵便物を運送した。

脚夫に変わって新しい郵便制度が開始された世相不安定時代に、遞送脚夫が六連銃のピストルを携帯し、身の危険をおもひても郵便物を保護し通信

## ふる里紹介

## 三津間地区

の秘密を確保し、安全確実に届け、新しい郵便制度の普及に努力した姿に頭がさがる思いです。今では、赤い自働車の金谷千頭間の新緑したる川根街道を毎日二柱復して、三川根に発信、到着する郵便物を運送している。

中川根郵便局長

三津間地区は、久野脇区内で大井川の河岸段丘でできた宮人原と西方山がせまって南北に長い茶栽培のさかんな地区です。松島薬師堂ハイクニコスやオリエンテリグコースにもなっていて、休祭日には行車の人々も訪れますが、通りぬきの自働車は大井川の対岸を走るので、車公害もなく住みよい所です。三津間の由来は、昔は地区が三つに分かれていたらしいとの話も聞きました。現在も三津間、宮人原（八幡神社をさかに上下）と三津間渡に分れています。この地区は、長い歴史を持つ家と、他の土地から移り住んだ家、戦後満州開拓より帰られた家と様々ですが、古い歴史を物語るお堂や祠、民話、伝説、里談など数多くあります。それらを引き継いで行こうとする地区の人々の矜持が、いふれあひあり、中川根でもふる里意識の強い二心柄に思えます。

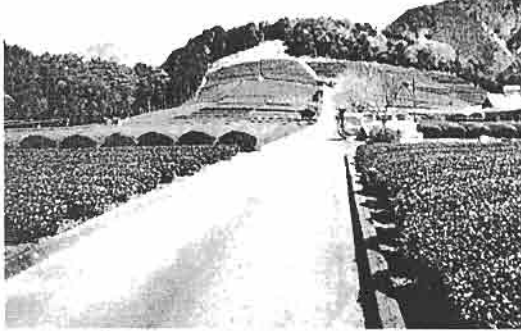
◎ 佐々木薬師（善薬師）について

三津間より南西山中に寺と十分位で薬師堂につきます。例祭は毎年十一月七日、八日に行なわれますが、十千十二反の庚子の年（六十二年）に御開帳とあわせて、当り年には必ず特別の大祭を行い、佐々木薬師の由来や古事を広く開示紹介して多くの善男善女の御参拝をお待ちすることになっています。又千葉山智満寺の飛地境内でもあります。今までの御開帳は、元文六年（一七四一年）寛保元年（一七五〇年）安永八己亥年（一七九七年）智満寺十四代祥山和尚により御開帳、天保十一年庚子（一八四〇年）明治三十五年庚子（一九〇二年）

昭和三十五年庚子（一九六〇年）智満寺伝道和尚により御開帳  
この次の御開帳は（二〇二〇年）

石間良平さん方が、かつて龍山寺の寺屋敷で薬師堂は前田満平さんの横にあったと云われていますが、戦国時代武田信玄によって焼打ちにあい、如来像もお堂も焼けてしまったという事です。慶長九年三月（一六〇四年）杖沢（八キロほどの山中）に再建さ





上 三津間地区 下 宮人原

れましたが、遠方まで大正三年二月に現在地に移されました。薬師如来像は誠に美男でお在します。妻薬師と愛称されるのは、願をかければ良いお嫁さんが授かるといわれています。如来像は十二神将に守られており、又お堂の脇には子持石がまつられていて、子供に恵まれない人には必ず授けて下さるといわれています。佐沢薬師は人のいとなみ、生命の神様と云えます。祭に行われる火おどり(ヒョウドリ)は焚火を取り巻いて輪になり肩に手を組み合せて踊ったもので、村中全家中安全を祈願するためのものです。このころは焚火はしません。お堂の中で徹宵スラム組んで面白く踊りまわります。ヒョウドリは昔から村人の間で語りつき歌われつづけて来て、歌詞もたくさんあります。が現在老人の口だけしか歌われていないので、先祖の残した貴重な文化遺産は是非残されてほしいものです。一節紹介致しますと

- ・佐沢薬師は妻薬師、伴侶はくけお願をかけた。
- ・地名の甚太が来るそうて川の瀬の鳴るおけが鳴る。
- ・心よく持て峠の松、心わるいと風は逢う
- ・心わるくはごさりめが立湯悪くて風に逢う ヒョッコ
- ・東山から西山へ青い女人の影がさす
- ・青い女人の影ではなくて青い羽織を着た殿御



新築された不動尊の祠 写真提供 諸田秀男さん

※ 社宮子(しゃぐじ)さん

境川の近く、県道の東側に口中の神様としてかわった石がまつてあります。ある家で以前親から子へかわるがわる熱が来て苦しんで信心者にみてもらったところ、近くに神様があると易がまじりました。たどって行くくと社宮子さんがあるところまでまつています。その後、社はケロロと名おったそうです。

※ 三津間渡に造り酒屋があったこと

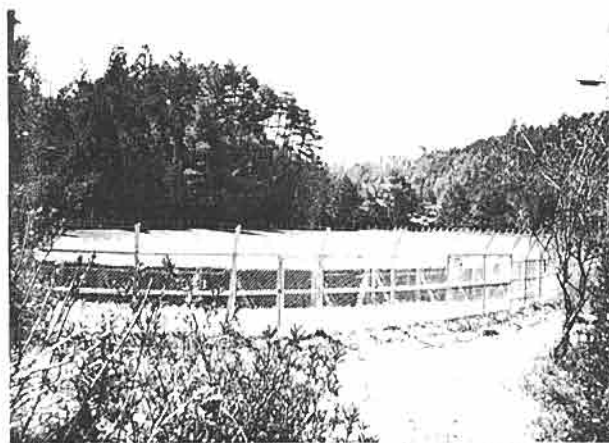
三津間渡に藤田家という酒造がありました。今も石垣は残っていますが、当時資産家で智満寺に八幡のおみやげの絵を寄附し、薬師燈籠(色)をあげ、一説に不動尊も先祖じやんの盛さんの寄附で、何らかと云われています。現在茶畑ですが広い田んぼもあつたといふことです。(米作り)

※ 七人塚

東京山の平(遠くに富士山を望む)に昔木挽さんが毒きのこを食べて死んだお墓があります。

三津間地区は現在しんと人のつらかりを大切に、庚申さん(かのえさる)(作物の神様)が六本あり、神代混合(南無青面金剛童子)や、秋葉講もやっています。

資料は、飯沼本膳平さん著むかしのわき、中原今雄さん、藤田和さんにお聞きしました。



中部電力久野脇発電所 貯水槽

※ 頭の二つある白いへび  
昔は米にしろ麦にしろ食へる分は下から舟で運んできました。舟つき場(堤堤北側の曲り角)に小さな池があり、その水を利用して水車小屋を建て、米や麦をつこうとしたが、頭が二つある白いへびがあらわれ、だれも気が悪がり近寄りません。えらい和尚さんがそのへびをまつりこみ、その上に不動尊をたてました。不動尊には、天明三年九月吉日(一七八三年)と刻まれてあります。それから白いへびは出なくなり、ました。水車小屋のあともわずかながら残っています。

不動尊の祠が、久野脇出身の川崎孝平さんの寄付により新しくなりました。(東京在住)  
この一月八日落慶式が行われ、地元の方々も多数参列し、今後不動尊を大切に祭ってまいりたいとのことです。

# ふる里通信 一年がすぎました。

ふる里通信を登刊して一年がすぎました。全国にいらっしゃるふる里出身の方、又中川根をふる里と思ってお下さる方々に、中川根ふる里通信をお送りしたので、昨年四月でした。又めぐって来た春に月日の流れの速さを感ずります。

皆様の暖かい言葉にはげまされて、第五号まで登刊する事ができました。ごまごまな手際誤りなど本当に申しわけなく思いますが、今後引き続き購読願いたく思います。

皆様からの御意見、投稿、情報をお待ちしております。又ふる里の事でこんな事が知りたい、案内書がほしいなど要望がいろいろあります。電話でも手紙でも御一報下さい。

屋号の本の様にはふる里にはない出版物は、今後紹介して行きます。先日金谷以北の小中学校文集の創刊号(五十号までの作文集)川根の子どもが出版されました。残部はありませんので、中川根の方の作文とふるさと通信のために紹介します。紹介したいと思っております。

このたび農協中央会のおまてとキャンペーンシリーズに「中川根ふる里通信」が補助金をいただいたさま、今後の版面充実と皆様との交流に役立てたいと思っております。先行きの心配もなく、本當にうれしく感謝しております。

現在「中川根ふる里通信」定期購読会員は四百五十名ほどです。六百名位になったら希望を大にしています。どうぞ皆様今後ともよろしくお願いたします。

## 定期購読のお願い

「中川根ふる里通信」は有料発行です。(一部千円100円)皆様の定期購読申し込みがこの通信の発行を支えます。今回は、郵便振替用紙を同封致します。どうぞ引き続き定期購読会員になっていただきます。ふる里出身の友人友人にも「中川根ふる里通信」を紹介して下さい。お申し込みは郵便振替口座(名古屋) 428-03 7-81556 藤原郡中川根町上長尾 990 中川根町役場 経務課 ふる里通信係 宛 電話は 05475(6)0015 印-27中川根 川根節子



待ちに待った春は、今の世の中に似て、ふる里の自然を、花の様に、ぐえとさせて先へ先へと咲かせます。

桜花や桃、ほたん杏の様に美しく人の目を引き寄せさせてくれる花や、こなりや柿などの様に新芽が美しく、ものけやまやしみじみは、じっと見なければ判らない様子の山菜の花を咲かせます。

大乳山の方では、赤や白おつじが、今から四月終りごろが見ごろになつて、つづの山をこえた春野の京丸ぼたんの位設の花は、赤や白おと。

中川根町の花は、つづじですが、みまつづじ、山つづじ、どうたんつづじ、赤白や、おつじ、少し遅れて、つづきと種類も豊富で、皆様にもお見せ出来たらうと思えます。目を開ければ、それだけにふる里の光景が浮んで来るかも知れませんね。

事でこの季節になると目に浮かぶのは、草刈場に群生した、つづじの花です。赤、赤色が主体ですが、一株、一株の色や、花の大きさが少しずつちがうのです。坂道を遠回りして、花の中に入ると、つづじ、みつをすたりして、いつまでも、道にいた事が、まろやうの事の様に思われます。

子供達の様に、時は自由にとるれは、わけて、ゴールデンウイークあたりには、中川根にいらっしゃる、は、い、か、が、で、し、う、か、の、山の本々も花も、鳥も、お、い、い、空、気、も、山、菜、(ま、む、さ、わ、ら、び、せ、ん、ま、い、ん、ど)も、ま、つ、と、皆、様、と、や、さ、し、く、む、か、え、て、く、れ、う、で、し、う。

今回号は少々思ひ出号に、なつた様に思われますが、青い鳥のチルチル、ミルが、辛、せ、の、鳥、を、さ、が、し、て、一、番、初、め、訪、れ、た、り、が、思、い、出、の、図、皆、様、も、し、は、一、現、世、を、忘、れ、て、ふ、り、返、る、期、念、に、な、れ、は、辛、い、と、思、い、当、方、も、今、後、の、企、画、の、肥、に、し、たい、と、思、い、ま、す。

五月になれば、ふる里は新茶の時期、今年も茶と、まろ、中川根の名産と、繁、栄、の、為、に、静、岡、県、茶、品、評、会、に、よ、い、成、績、を、あ、げ、よ、う、と、全、町、上、り、て、頑、張、っ、て、い、ま、す。三、四、月、の、低、温、に、よ、る、新、芽、へ、の、影、響、も、心、配、で、す、が、農、家、の、皆、さん、の、顔、は、明、る、今、年、は、よ、い、お、茶、が、取、れ、そ、う、で、す。



印刷 川根印刷所(徳山)